

論文要約

論文題目 トランスジェンダーを生きるという体験をめぐる「質感」的心理学——
性を他者との関係性から再考する——

申請者 町田 奈緒子（町田 奈緒士）

論文要約

本研究は、性を他者との関係性の中で立ち上がるものとして捉え直すことによって、トランスジェンダーを生きるという体験をめぐる「質感」——言葉になる前の身体感覚や実感——について明らかにしたものである。

プロローグ

筆者は一人のトランスジェンダーとして生きてきた中で、従来の研究には「実感」や「他者との関係」、「調査者自身の体験」という視点が欠けていることに思い至った。こうした筆者自身の体験や直観に重きを置きながら考察を進めるという本研究のスタイルは、本論における先行研究レビュー、方法論的検討、事例編の分析に通底するものである。

第Ⅰ部 理論編

第1章 トランスジェンダーをめぐる歴史と現代社会の動向

トランスジェンダーとは、ある性別に属しているという自己イメージとしてのジェンダー・アイデンティティが、出生時に割り当てられた性およびそれに関連付けられるものと一致しない人々として定義される。

古代に遡ると、トランスジェンダーを含む性別越境者は、シスジェンダー（非トランスジェンダー）にはない神性を発揮する者として人々から崇められていた。しかし、明治末～大正期に西欧の精神医学が導入されたことを機に、同性愛や異性装が「精神病」ないし「変態」とみなされるように変化していった。現代日本では、畏怖の念が薄れるとともに、「変態」とするまなざしを取り込むかたちでトランスジェンダーは人々から嗜好されている。つまり、メディアなどにおいて特殊な職能を発揮する存在として、イロモノないしキワモノとして揶揄する感情が入り混じりつつ、トランスジェンダーは「受け入れ」られているのである。

現代におけるトランスジェンダーを取り巻く医療・社会制度に目線移すと、日本では性別変更に対して過酷な条件を課しており、当人が望んでいない身体的特徴の改変を性別変更にあたってせざるを得ない状況にある。

トランスジェンダーを取り巻く社会や制度の背後には、性が所与の実体であり、中でも割り当てられた性という絶対的なものによって、性の他の構成要素や個人のライフスタイルが一義的に定まるとする見方が根強く存在していると考えられる。

第2章 先行研究の概観と本研究の目的

古代の哲学者の論考や精神分析家の論考、社会構造論においては、社会・文化的・制度的な影響を受けながら構築されるような性の側面が論じられている。加えて、現象学的な発想を持つ論者らはより身体に根ざした論を展開しており、その概観からは、性が他者とのあいだにおいて立ち上がるような性質を持つものであるという示唆を導くことができる。

他方で、近年の数量的研究や質的研究では、性別違和を個人の内部にある固定的なものとして捉えるパラダイムに依拠している。そこでは、古典的文献によって示唆されているような、社会や環境によって構成されるとともに他者とのあいだに現出するという性の構築的・関係的な側面が看過されてしまっている。また、トランスジェンダーを生きるという体験に伴われる実感や身体感覚に迫ることができていないという問題点がある。つまり、従来の研究からは、協力者の個別具体的な体験の様相や、その体験の「質感」が見えてこないのである。しかし、トランスジェンダーが「安心して生活できるような支援」を考えるにあたっては、非トランスジェンダーが追体験できる記述的な研究が必要である。

以上を踏まえ、次に示す本研究の問題と目的が導出できる。

問い①：性が他者とのあいだに立ち上がるとは、どのようなことを意味しているのか。
そして、性を雰囲気として捉えることで、どんな事態が把握されるのか

問い②：トランスジェンダーを生きるという体験に伴われる「実感」や「身体感覚」、
そしてその根底にある構造はどのようなものであるのか

問い③：トランスジェンダーが他者や社会に開かれながら生きていくためには、どのようなことが必要なのか

第3章 本研究における方法論の検討

トランスジェンダーを生きるという体験とそれに伴われる「実感」を捉え、読者に伝えるためにはどのような記述を行えば良いのだろうか。近年興隆している主要な質的研

究では、調査者自身のこれまでの体験やインタビューの場で感じられたことが、分析から排除されてしまっている。その問題点に鑑みると、調査者自身がインタビューの場で間身体的・間主観的に感じ取ったものを積極的に分析（メタ観察）に盛り込む手法を取る語り合い法が、本研究の問題意識に適合すると考えられる。加えて、メタ観察における筆者の分析が協力者の体験に沿ったものであるか、筆者自身の体験に基づいた恣意的な捉え方となっていないかを確認しながら考察を行うには、対話的な自己エスノグラフィの併用が有用であるだろう。

本研究の記述方法に加え、読み方（読まれ方）についても検討したい。筆者が読み手に促したい「追体験」とは、身体がこれまでの自身の体験をブリコラージュ的に調整するプロセスのことであり、それが一定程度達成されるとき、書き手の体験やそれに伴われる感覚を感じ取る可能性が読み手に開かれてくる。

本研究が目指す知は、従来の質的心理学とは異なり、身体を開き、重ね、わが事のようを受け止めていくような読み方のもと、読者の体験に刻まれ、その生を揺さぶる知である。それは、体験に伴われる実感と身体感覚、つまりは「質感」についての知を創出する試みであるため、「質感」的心理学という学問として構想できるだろう。

第Ⅱ部 事例編

第1章 性を他者との関係性から捉え直す——〈雰囲気〉として感受されるものとしての性

2名の協力者との語り合いと筆者自身の体験を分析することによって、問い①に答えることを目指した。口にせずとも相手の性に分かるという語りや、男子校で培ってしまった「におい」が抜けないといった語りの分析から、性はこれまでの他者との関係性の歴史を通じて形成されてきた振る舞いの様式や存在のあり方が、身体に滲み出たものであることを明らかにし、それを〈雰囲気〉と名指した。これまでのアイデンティティ研究から得られる知見を踏まえるならば、〈雰囲気〉とは、意識的に本人が形成してきたわけではないが他者から感受されるような性の受動的・客観的側面を把握するための概念である。それは、能動的・主観的に自己決定できるものとして性をみなす従来の要素主義的な性理論が看過してきたものであるだろう。他者との関係性の中で現出するという側面から性を把握することによって、トランスジェンダーの苦悩や葛藤がより鮮明に浮かび上がると考えられる。

第2章 トランスジェンダーを生きるという体験に伴われる実感とはどのようなものか——〈擬態〉

6名の協力者との語り合いを提示・分析することによって、問い②を解明することを

試みた。特に深いレベルでトランスジェンダーを生きるという体験を言語化してくれる可能性があるように感じられた1名のトランス女性の協力者（ツバサ）の語りに焦点を当て、ツバサと他の協力者の語りを重ね合わせながらトランスジェンダーを生きるという体験に伴われる実感の諸側面を記述していく方式をとった。具体的には、（１）ビクビクと息をひそめる感じや、（２）無理をしてシスジェンダーを演じ続けねばならないしんどさ、（３）割り当てられた性特有の生理的機能が現象するときの焦りや不全感、（４）一枚の壁を隔てるような他者や世界との関わり、（５）親密な関係性において感じられる後ろめたさ、（６）自身の性を問うまなざしの無限循環による自己像の曖昧化、（７）本人にすらキャラなのか本体なのか分からなくなる感覚といった諸側面があることを明らかにした。そうした諸実感の根底には、生存戦略として女性／男性という姿に「似せる」ように振る舞わざるを得ないという構造があり、その構造を記述・説明するために〈擬態〉という概念を導入した。〈擬態〉は、性を問うような他者の過酷なまなざしを取り込む結果として生じるものであり、それによってトランスジェンダーの自己像は絶えず揺さぶられ続けるのだと考えられる。

第3章 トランスジェンダーはどのように他者や社会と繋がっていくのか——〈器〉

5名の協力者との語り合いと筆者自身の体験について分析することを通じ、問い③について検討した。各協力者の語りから、「GID（性同一性障害）」や「トランスジェンダー」といった言語的規定が安堵をもたらす場合があること、逆にそれが機能しない場合があることが分かった。こうしたケースを詳細に検討してみると、トランスジェンダーが自然体でいられるためには、「トランスジェンダー」などの言語的規定が一定程度重要な役割を果たすものの、それ以上に〈雰囲気〉をありのままに受け止めてくれる他者の存在が重要であることが明らかになってくる。こうした言語的規定や他者を総称して〈器〉と呼ぶことにすると、トランスジェンダーのもやもやとした未分化な感覚に収めどころを与えてくれる〈器〉の存在こそが、トランスジェンダーが安心して生きていくために必要不可欠なのである。

一方、〈器〉がない時に、トランスジェンダーは他者から向けられる男女二元論的なまなざしを取り込んでしまい、自分の一挙手一投足について、「自分の今の振る舞いは、あまりに女性／男性的に過ぎたのではなからうか」と、逐一考えてしまうような状態に陥ってしまう。そのように本来ならば考え込まなくても良いような一つひとつの事柄について、それは「男性的なのか、女性的なのか」という問いが浮上し、それを峻別する必要性に迫られてしまう現象を「性化」と名指した。〈器〉の存在は、トランスジェンダーに男女二元論的な枠組みから自由なあり方を許すのである。

第4章 最終考察

性を〈雰囲気〉として捉え直す本研究の試みによって、他者との関係性の中で形成されるような性の受動的・客観的側面が浮き彫りになった。そうした新たな性の把握の仕方から、トランスジェンダーが生き生きと生を営むためには従来の「合理的配慮」のみでは不十分であり、自らのありのままとして自然に醸し出される〈雰囲気〉を他者によって受け止められることこそが決定的に重要であると結論付けられる。トランスジェンダーを生きるという体験について今後も探究し続けるためには、本研究が志向したような実感を重視する「質感」的心理学が必要となるだろう。

※注記

本論文の事例編第1章と第2章、第3章の基となった論文は、すでに以下の学術誌に掲載済みである。本論文の内容等を引用する際には、これらに掲載済みの論文、または本論文の原著（京都大学人間・環境学研究科所蔵の原典あるいは今後出版予定の著書）に直接当たっていただきたい。

第1章

町田 奈緒士 (2019). 性を他者との関係性から捉え直す——〈雰囲気〉として感受されるものとしての性——. GID学会雑誌, No. 12, 7-19.

第2章

Machida, N. (2018). An explorative examination into Japanese transgender experiences. *Annual Review of Critical Psychology*, No. 14, pp. 136-153.

町田 奈緒士 (2020). トランスジェンダーを生きるという体験に伴われる実感の探索的検討. 人間性心理学研究, 37(2), 169-180.

第3章

町田 奈緒士 (2018). 関係の中で立ち上がる性——トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討——. 人間・環境学, No. 27, 17-33.